目的 小児腹部リンパ管腫は根治のために腫瘍全体の切除が一般的であるが、腹部広範に及ぶものの場合は切除不可能な場合もある。腹部リンパ管腫の治療法、特に切除不能と考えられた場合の硬化療法について検討した。

対象および方法 1988年以降当院で経験した腹部リンパ管腫24例の治療を後方視的に検討する。結果 患者は男児19例、女児5例で、発症年齢は生後直後から17歳1か月（中央値3歳2か月）であった。治療であるが、4例が2か月から1年半の経過観察中に縮小消失、15例が腹腔切除、5例が硬化療法を施行された。経過観察例はその後再発、感染を認めない、開腹切除術例のうち5例は再発なく経過観察しているが、2例で再発を認めた。そのうち1例はドレナージ、硬化療法を施行するもリンパ管腫が増大のため再度開腹切除し、その後再発を認めていない。もう1例は腹部全体にリンパ管腫が再発、全身切除不可能と判断し経過観察中であり、感染に対し保存的療法が無効の場合にのみ開腹し感染部の切除、焼灼、ボルテルール散布を施行している。硬化療法例は全例ビシバニールを使用、硬化療法部を縮小し、その後リンパ管腫の増大、感染を認めていない。

考察 腹部リンパ管腫は根治術として腫瘍切除が施行されるが、切除困難と考えられる巨大リンパ管腫に対する硬化療法は腫瘍縮小、感染予防という点において切除術と同等の効果を認めるものと考えられる。

目的 リンパ管腫は病変部位や病型により治療に難渋することも少なくない。当科で経験したリンパ管腫症例における治療の有効性や合併症を評価するとともに、難治例を症例提示する。【対象と方法】1980年から2010年までに当科で経験したリンパ管腫症例57例について治療法・合併症・予後等を検討した。【結果】年齢は生後0日から16歳（平均25.3か月）、発症部位は長管型21例、海綿型7例、混合型25例で4例は不明であった。手術は28例（49.1%）に施行され、全摘症例が22例、部分切除症例が6例であり、6例に再手術を要した。OK-432局注射療法導入後に手術を施行したのは4例（OK-432無効例・上肢可動制限症例・腸間膜原発症例・全腫瘍との鑑別困難例）だった。手術合併症は14例（50%）に認めた。リンパ管腫9例、呼吸障害2例、低酸素脳症1例、顔面神経麻痺1例が認めた。プレオマイシンは9例に使用され、合併症なく、有効例2例（24.4%）で、うち6例が後に手術を施行された。OK-432は30例に使用され、囊腫症は11例中11例（100%）が消失もなくはほぼ消失した。混合型では14例中12例（85.7%）に有効であったが、消失は1例のみであった。海綿区は3例中3例（100%）に縮小を認めたが、消失例はなかった。OK-432投与による合併症は2例（7.7%）（一時的な気道圧迫・経口摂取困難）に認めた。また難治症例として、巨大な後腹膜原発病変と広範囲に渡る体表海綿状病変に対するOK-432使用例を提示する。

【まとめ】OK-432は有効な治療法であるが、海綿状病変を中心とする難治例や投与困難例では治療の工夫が必要であり、各治療の欠点・利点を熟慮した上で治療のstrategyを立てることが重要である。